

サラワク州イバン村落の世帯にみられる生業選択

市川 昌広

京都大学東南アジア研究センター 京都市左京区吉田下阿達町46

I. はじめに

イバンは、Leach[1950]やFreeman[1955]を通じて山地焼畑民としてよく知られている。さらに、その後の研究により、狩猟や林産物の採集、パラゴム、コショウといった商品作物の栽培、出稼ぎなどもさかんな様子が報告されてきた¹⁾。国内外の市場やそこへのアクセスといった社会・経済状況や村の地勢などの自然環境に応じて、焼畑を含めた複数の仕事がおこなわれている。本稿の調査村においても、生業²⁾となっている仕事にはさまざまな種類がみられる。それらへの従事状況を詳しく観察すると、全世帯においてさまざまな種類の仕事が一様におこなわれているのではないことがわかる。世帯の仕事の内訳は大きく異なっているのである。稲作、コショウ栽培、籐製品作り、出稼ぎなど多種類の仕事をおこなう世帯がある一方で、ほぼ出稼ぎだけをしている世帯もみられる。現金獲得のために重要な出稼ぎをおこなわずに暮らしている世帯もある。以上からひとつの村においてさえ、ある特定の仕事をもって、村でみられる生業を代表させることは難しそうである。

さらに経時的な視点を加えると、イバンや彼らの村にみられる生業を特定することは一層難しくなる。生業となる仕事の種類や規模が大きく変化するためである³⁾。たとえば、本稿の調査村では、1940年代以前は陸稲・水稲栽培と野生ゴムの採集を、また、1950年代から1970年代には水稲栽培とパラゴム栽培を生業としてほとんどの村びとがあげる。しかし、1980年代中ごろから地方都市の発展などの影響を受けて、上記のように生業に含まれる仕事が多様化し[Ichikawa2003]、世帯間で大きく異なるようになった。

イバンの村々でこのように生業が大きく変化し、あるいは、世帯ごとに生業が大きく異なるのはなぜだろうか。これが本稿の課題である。これまでの研究の多くは、仕事の変化を村や地域の単位で捉え、村外の社会・経済状況と対比させ描くにとどまることが多かった⁴⁾。しかし、生業の担い手は、世帯と世帯を構成する個人である。それらに着目しなければ、生業の変化や選択の背景は明らかにならない。このために、本研究では一つの村を選び、世帯と世帯構成員各々を対象にした調査をおこなった。

- 1) 狩猟・採集活動についてはParnwell and Taylor[1996]、商品作物についてはSutlive[1992]、Cramb[1988]、Padoch[1982]、出稼ぎについてはFreeman[1955]、Kedit[1993; 1988]、Padoch[1982]に詳しい。イバンに限らず、近年の生業の多様化は、ボルネオ島の焼畑民に広くみられる [King1993]。
- 2) 広辞苑 (第四版) によれば、生業とは生活のための仕事である。村びとに対し、彼(女)の世帯または彼(女)自身にとって「暮らしをたてるために重要な仕事は何か(nama pengawa beguna kena nuan ngidup?)」と尋ねた場合、たいてい一つあるいはいくつかの仕事の種類が答えとして返ってくる。本稿でいう生業とはそれらの仕事を指している。
- 3) 村外の社会・経済状況に応じたイバンの生業の変化については、Sutlive[1992]、Cramb[1988]を参照。商業伐採による自然環境の変化に伴う生業への影響についてはParwell and Taylor[1996]を参照。また、ボルネオ島のカヤンKayanやクニャーKenyahなどイバン以外の民族でも、村外の社会・経済状況に応じた機敏な生業の変化がみられる [Guerreiro1988; Colfer1983]。
- 4) たとえばイバンについては、Sutlive[1992]、Cramb[1988]。イバンの例ではないが、東南アジア島嶼部の研究では、Seavoy[1980]、高谷[1979; 1985]など。

本稿は以下のように構成されている。Ⅱでは、調査村の概要とイバンの生業について説明している。次にⅢでは、調査時に村でみられた仕事の概要を述べた後、各世帯がどのような仕事を選び取っているのかを示し、世帯ごとに生業が大きく異なる要因を分析している。Ⅳでは調査時にみられた新たな仕事の普及過程を村びと個人々の行動に着目しつつ述べている。最後にⅤでは、まとめと結論を述べ、各世帯の労働力事情に応じて柔軟な生計のたて方がみられることを指摘している。これまでのイバン研究では、生計をたてる基本単位として**bilek family**（本稿でいう世帯）が着目され、生業が検討されてきた。これに対して、本稿では、世帯構成員個々に着目することの重要性を強調している。すなわち、年齢、性別、資質、仕事の嗜好、仕事の技術の有無といった個人々の事情、さらには個人々の裁量が生業の選択に密接にかかわっているのである⁵⁾。

現地調査は、調査村で村びとの家に下宿しながら、1995年7～8月、1996年2～6月および10～11月、1998年8～12月に実施した。村の仕事の内容やその仕事がおこなわれるようになった経緯について、適宜、観察、聞き取りをおこなった。次に、全世帯を対象として、仕事の状況の聞き取りを実施した。聞き取り項目は、世帯構成員の名前、年齢、性別、おこなっている仕事、仕事の規模、仕事にかかわる頻度、各仕事からの収益である。また、必要に応じて農地の計測をコンパスと巻尺を用いて実施した。各世帯での聞き取りの際は、イバンの助手を使い、イバン語によって実施した。

Ⅱ. イバンの生業と調査村の概要

1. 村の位置およびその周辺の概要

サラワク州の面積は約12万km²で、そこに160万人余り [Department of Statistics, Malaysia 1997] が住む。地形的には、沿岸部や河川沿いにやや内陸まで広がる低地帯、河川中流域に広がる丘陵地帯、そして上流域の山地帯の大きく3つに分けられる。住民は、イバンをはじめ、華人、マレイMalay、ビダユBidayuhなどの多民族からなる。このうち、イバンは、ここ400年ほどの間にサラワク内全域に勢力範囲を拡大した。今日では、ほとんどの河川の中・下流域に広く居住し、州の人口の約1/3を占める最大民族である。

調査をおこなったN村は、ミリMiri省マルディMarudi県に属する。村はバラムBaram川の支流バコンBakong川に沿って広がる低地と、内陸からせり出してきた丘陵が出合う地点に位置している。このため、村の面積の約37km²のうち、半分は丘陵地に、残り半分がバコン川沿いの湿地に占められる。村は、ミリからミリ・ビントゥル道路（以下MB道路と記す）をビントゥ

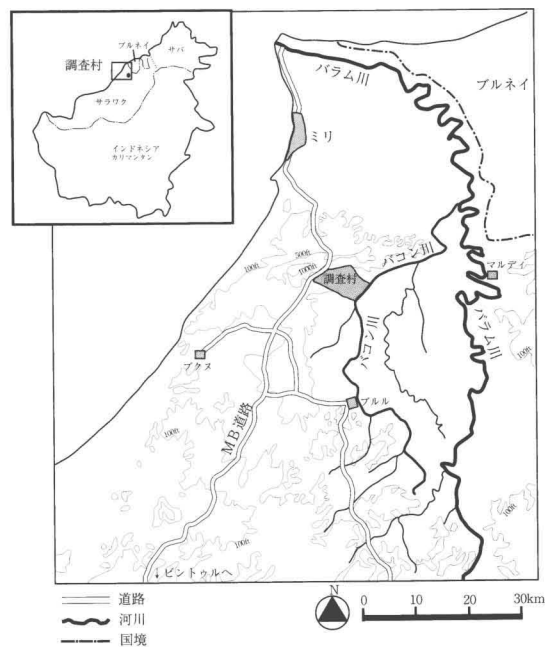


図1. 調査村の位置

5) 個人の行動様式が国家や共同体のあり方に規定・影響されることも見逃せないだろう（たとえばホン[1989]）。しかし、本稿では、従来看過されてきた、村でみられる個人々の能動的行動が支えている生計の実態分析に焦点をあてた。したがって、個人と国家や共同体との関係については、今後の課題としたい。

ルBintulu方面へ30kmほどのところに位置する(図1)。ミリは、市街地人口約10万3千人[ibid.]で、サラワクの中では3番目の人口を擁する。1970年以降の石油産業や1980年代のパラム川流域の木材伐採産業の隆盛に影響され、さらに、1990年代に国や州全般にみられた経済成長とともに急速に発展してきた地方都市である。MB道路は、1960年代中盤から1970年代前半にかけて建設され、その後、拡幅や舗装などの整備が進められてきた。イバンは、マルディ県においても、全人口の約3分の1(23千人余り)を占める最大民族である[ibid.]。とくにバコン川沿いには、下流から上流に至るまでイバンの村々が続いており、イバンが多く居住する。

2. ロングハウスコミュニティと世帯

ロングハウス⁶⁾は、イバンが居住する長屋式の住居で、サラワクでは一般的にみられる。その内部は基本的にビレック*bilek*(居室)とルアイ*ruai*(通廊)にわかれる。ひとつのビレックにともに住むメンバーは、多くの場合、婚姻と血縁でつながり、生計を一にする独立した集まりを構成する[Freeman1970]。Freeman[1970]は、その集まりをビレック家族*bilek family*と呼んだ。イバン自身も同じビレック内の構成員の集合をセビレック*sebilek*というひとつの単位として認識している⁷⁾[ibid.]。調査村でも基本的にビレック家族単位で生計がたてられており、本稿でいう世帯の構成員とは、ビレックに属する人々を指している。多くの場合、ひとつの世帯は、親夫婦と子の2世代の核家族として構成されていた(調査村では41世帯、49%)⁸⁾。一方、親夫婦および子夫婦とその子供の3世代が同居することも普通で、さらに4世代の同居もみられる。ただし、イバンのビレックでは一世代に2組以上の夫婦は存在しないとされるため⁹⁾[Freeman1970]、世帯の構成員の人数はそれほど多くならない。調査村の世帯あたりの構成員数の平均は5.4人であった。

1996年5月の時点で、調査村の世帯数は84、各世帯の構成員の合計は454人である。しかし、婚入、婚出、出生、死亡、出稼ぎ等の理由で在村人口は常に変動している。とくに、出稼ぎのために世帯の構成員のいずれかが数か月間村を空けることは普通である。このため、村びとの出入りは激しく、実際の在村者数は少なくなる。1995年6月～1996年5月の1年間のうち6か月以上在村した者は262人である。調査村のほとんどの村びとはイバンであるが、6人の華人男性と、1人のカダザンKadazan男性が村の女性と結婚していた。

イギリス人為政者Brookeによる統治開始(1841年)以前には、ロングハウスコミュニティを超えるレベルでの地域的統合は存在しなかった[Pringle1970]。Brookeやイギリスなどによる統治を経て、マレーシア連邦下の一州となり今日に至る間、ロングハウスコミュニティは農村に住むイバンにとって基本的な統合の単位であり続けた¹⁰⁾。

ロングハウスコミュニティは、自立性の高いビレック家族の連合体とみなせる[Freeman1970]。ビレック家族の自立性の高さはつぎに示すような例で説明されている[ibid.:61-129]。農地や休閒地の保有と管理の単位は各ビレック家族であり、コミュニティの管理下にある土地は墓地を除いて存在しない。ビレックは、ひとつのロングハウスを抜け、親戚がいる他のロングハウスへ転居することが

6) イバン語で*rumah panjai*。*rumah*は家屋、*panjai*は長いの意味。

7) Freemanとは異なる調査地域や調査年代のイバン研究者からの報告によっても、ロングハウスとビレックとの関係、およびビレック内の人員構成は基本的に同様である[Sutlive1992; Padoch1982; 内堀1996:57]。

8) 調査時において、夫婦2人のみからなる世帯はなかった。

9) 調査村では、6世帯(7%)の世帯主が2組の子夫婦をセビレックに含めていた。これには以下に記すような背景がある。すなわち、ほとんどのイバンがロングハウスに住んでいたかつては、結婚後、夫婦は独立して新たなビレックを作るか、彼らの内どちらかが生まれたビレックに住んだ。このため、結婚した子の属するビレックは明確であった。近年、結婚後、町に住むイバンが増えるにつれ、それら夫婦が独立したのか、あるいは彼らのどちらの生家に属するのかを明確にすることが出来なくなった。このため2組の子夫婦をセビレックの構成員に含める世帯主がいたと考えられる。

10) 1880年代前半にBrooke政府は、ロングハウスコミュニティの上位レベルに*penghulu*という役職を置いた[Pringle1970]。今日でもその制度は存在する。しかし、イバンにとっては、ロングハウスコミュニティがもっとも重要な基本的集合の単位であり続けた。

自由にできる。イバンのロングハウスコミュニティでは、世襲の首長や身分階級は存在せず、その社会は基本的に平等主義的で、長*tuai rumah*の権限も限られているなどである。個々の村びとは、ビレックの構成員として、慣習的な取り決め*adat*に従いロングハウスコミュニティの中で暮らしている。しかし、上述のように、その社会的な縛りはゆるく、社会的あるいは経済的行為にあたりビレック家族の自立性の高さが先行研究では指摘されてきた[Freeman1955:1970:1981]。

3. イバンの生業

「I. はじめに」で述べたとおり、イバンは焼畑以外にも、湿地での水稲栽培、パラゴム、コショウ、カカオなどの商品作物の栽培、自家消費や販売のための狩猟や林産物の採集、あるいは出稼ぎなど、さまざまな仕事にかかわってきた。出稼ぎは、イバン社会において古くからみられた慣行ブジャライ*bejalai*と強く関係している。かつてのブジャライは、若い男が一定期間村を離れ、旅を通じて知識を得るとともに経験を積み、さらに林産物の取引などによって富を得た後に帰村するという慣行であった[Kedit1993; Freeman1955]。そのような慣行が背景となって、今日でもイバンの男による出稼ぎはさかんである[Kedit1993]。

先行研究では、本稿の課題である世帯と生業の関係、あるいは生業の変化の特徴についてのいくつかの事例が報告されている。ひとつは、稲作作業が世帯ごとの労働力事情に応じて柔軟に代わることである。たとえば、森の伐採にかかわる男手が足りない世帯は、より楽に伐採可能な二次林に焼畑を開いたり[Freeman1955]、同じく伐採の楽な湿地の草地を開いて水稲栽培をおこなう[Dove1985]¹¹⁾例が報告されている。水稲栽培では、労働力の状況に応じて世帯ごとに栽培技術や稲作法に違いがみられる[市川2000]。たとえば、作業者が高齢、病弱といった理由で、イネの植付けを作業が楽な散播でおこなうなどである。労働力については、ブジャライに出ていた男が、男手のかかる森の伐採時に帰村し、その作業のあと再びブジャライで村を離れる[Freeman1955]といった、稲作と他の仕事との間での季節的な労働力配分の事例がある。

もうひとつは、イバンの生業が村を取り巻く社会・経済状況に応じて機敏に変化することである。経時的な変化の事例は、すでに「I. はじめに」で述べた。同じ時期においても地域ごとの社会・経済状況に応じて、生業の特徴は異なる。たとえば、私が訪ねた範囲でも、バレBalleh川流域の商業木材伐採がさかんでそこでの仕事からの収入が多い地域、バタンアイBatan Aiダム湖周辺の観光にかかわる収入が多い地域、ミリ・ピンツゥル間のオイルパーム工場近隣で村びと個人の経営によるオイルパーム園からの収入が多い地域などがみられた。一方、調査村の生業は、近年の道路の整備や都市化の影響を受けていた[Ichikawa2003]。村のかつての生活や生業は、おもにバコン川沿いの低地で営まれていた。しかし、1985年以降、MB道路沿いに焼畑(*umai bukit*)、湿地田(*umai paya*)、コショウ園(*kebun lada*)、果樹園(*kebun buah*)が開かれ、ラタン籠の製作、家畜の飼育などもミリで生産物を販売するためにさかんとなった。調査中の1996年には、ロングハウスがMB道路沿いに新築され、ミリへのアクセスはさらによくなった¹²⁾。

Ⅲ. 世帯によって異なる仕事の選択

1. 村での生計をたてるための仕事

調査村で1995年6月から1996年5月の1年間にみられた生業となりえる仕事を表1にまとめた。これ

11) Kantu'というイバン系(ibanic)の民族を対象とした研究である。

12) 調査村の生業や土地利用の変遷についての詳細はIchikawa[2003]を参照。

表1. 調査村において生業となっていたおもな仕事 (1995年6月~1996年5月)

仕事の種類	仕事の内容	実施世帯数 ⁽¹⁾	収入/年 ⁽²⁾ 、その他
漁 撈	バコン川や村内の小河川で、刺し網の設置、投網、笊の設置、釣り、どじょうすくいに似たザルですくう方法などにより魚がとられていた。村では入植当時からおこなわれてきた仕事である。	44	魚は、ほぼすべて自家消費された。川沿いのロングハウスに滞在中、食事には魚が頻繁にでた。
木材伐採・製材	バコン川沿いの湿地林で樹木を伐採・製材し、それを華人商人に売る。1トン製材するのに2人組みで3日ほどかかり、それが400リンギットほどで売られた。1997年では、政府の規制が厳しくなり、この仕事はみられなくなった。本文IV. 1参照	27	一世帯平均収入6,900リンギット(150~28,800リンギット)
籐籠の製作	森から籐が採集され籠が編まれる。製品はすべてミリなどで売られた。1人/日で15kgほどの籐が採集され、女ひとりによって、すべて製品化されるのに2週間ほどかかった。それが120リンギットほどで売られた。本文IV. 1参照	56	一世帯平均収入1,480リンギット(120~2,880リンギット)
湿地田稲作	湿地に田を開き、水稻を植え付ける(詳しくは市川[2000]参照)。本田準備(8月)から収穫(翌年3月頃)まで主な作業に150人日/ha前後かかった。とくに、移植と収穫に多くの労働力が必要。村では入植当時からおこなわれてきた仕事である。	41	ほとんどの世帯で収穫米は自家消費された。一方、余剰を売った世帯が6世帯あった。一世帯平均収入730リンギット(100~1,920リンギット)
焼畑稲作	丘陵斜面の森を開き、陸稲とともに野菜、根菜などを植え付けた。地ごしらえ(8月)から収穫(翌年2月頃)まで主な作業に51人日/haほどかかった。入植当時からおこなわれてきた仕事である。	17	生産物は自家消費された。
コショウ栽培	3月~5月に収穫され、ミリの華人商人へ売られる。収穫、管理の作業に190人日/haほどかかった。コショウ園の大きさはほとんどの世帯で0.1ha余り。村では1970年代前半からさかんになった。	21*	一世帯平均収入730リンギット(100~2,100リンギット)。コショウ園は30世帯が所有
果物等の栽培	成り年の結実時の2~3か月の間、週2~3日ほど採集に出かける。ドリアン、ランサットはミリへ運ばれ売られた。栽培は入植当時からおこなわれていたが、売られるようになったのは1990年代初め以降である。	16*	一世帯平均収入530リンギット(100~1,000リンギット)。果樹は75世帯が所有
家畜飼育	おもにニワトリやブタが飼われていた。入植当時から仕事である。1980年代後半以降、ニワトリはしばしばミリに運ばれ、華人商人に売られた。	68*	一世帯平均収入330リンギット(55~1,530リンギット)
野菜等の栽培	20m ² ほどの小さな面積の畑が多いが、生産物を売るために400m ² ほどの畑を持つ世帯もある。トウモロコシ、キュウリ、ナス、カラシナなどが作られた。大きな畑には、バナナ類、キャッサバも混じる。古くより、小さな畑はロングハウス近隣に作られてきた。	27	収穫物はほとんどの世帯で自家消費された。一方、8世帯はミリで野菜を販売。一世帯平均収入840リンギット(150~1,440リンギット)
雑貨屋経営	ロングハウスの部屋の一部に棚を設置し、そこで日常使う食料品等売っていた。	6	一世帯平均収入370リンギット(180~600リンギット)
人・物の運搬	自動車を持っている者が村びとを乗せ、おもにミリと村間を往復した。	3	一世帯平均収入2,420リンギット(220~5,760リンギット)
出稼ぎ	ミリ周辺の建設現場や、国内・海外での海底油田採掘のプラットフォーム(オフショアと呼ばれる)での仕事に就いている者が多かった。定職に就いている者はほとんどおらず、多くが数か月~1、2年で仕事を变えていた。本文II. 3参照	71	一世帯平均収入63,500リンギット(920~62,000リンギット)

注：(1) 調査対象期間中に規模や頻度にかかわらず仕事にかかわった者がいる世帯の数。

ただし、*は、それぞれの生産物を販売した世帯数。

(2) 1リンギットは約40円(1995年~1996年)

(3) 調査村への入植年は1900年頃と推定される。入植の経緯についてはIchikawa[2003]を参照。

出所：筆者の現地調査(1996年)

らは、村びとが生計をたてるために重要だとした仕事である（註2参照）¹³⁾。

村びとによれば、近年、MB道路沿いに生活の拠点が移るにつれ、現金の必要性が高まったという。森や川から豊富な食材が取れる川沿いでの生活に比べ、食材が得にくい道路沿いでは食費がかかる。加えて、教育費やロングハウスの建築費が出費の理由であった。このような中で、現金獲得のために出稼ぎは多くの世帯で重要であった。先に述べたように、イバンはブジャライ慣行を背景として、以前から出稼ぎはさかんであり、調査村で10代後半から20代の出稼ぎを経験していない健常者の男は皆無であった。出稼ぎの職種は経時的に大きく移り変わってきた。調査時におこなわれていたおもな出稼ぎは、ミリなどでの建設業、国内外の海底油田採掘プラットフォームの建設やそこのサービス業務であった¹⁴⁾。加えて、出稼ぎ以外の仕事からも現金は得られていた。たとえば、籐籠の製作、コシヨウ栽培、果樹栽培、稲作である。一方、おもに自家消費用の生産物または採集物を得るために重要とされる仕事もあった。湿地田稲作、焼畑稲作、漁撈である。

表1に示した仕事の中で、作業の季節が決まっており、比較的大きな労働力¹⁵⁾を要するのは、湿地田稲作の田の地ごしらえ、移植および収穫の各時期、焼畑稲作の森林伐採および収穫の各時期であった（表2）。コシヨウの収穫には、単位面積当りの労働力はかかる¹⁶⁾。しかし、各世帯のコシヨウ園は0.1ha程度と小さく、3~5月の間、断続的に収穫されるため、稲作のように集中的に作業をおこなう必要はなかった。その他、生態環境に強く影響され、間欠的におこなわれる仕事があった。川の水位と関係しておこなう漁撈や、成り年に左右される果物栽培である。残りの仕事は、村びとの都合に応じて適宜おこなわれていた。

表2. 仕事の季節性（横棒は作業が集中する時期）

仕事 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
湿地田稲作			■	■	■				■	■		
焼畑稲作		■						■	■			
コシヨウ栽培			■	■	■							
季節に関係なくおこなわれる仕事	生態環境に強く影響される仕事				漁撈、果物等の栽培							
	村びとの都合で適宜おこなわれる仕事				籐籠の製作、木材伐採・製材、家畜飼育、野菜等栽培、出稼ぎ、雑貨屋経営、人・物の運搬							

出所：筆者の現地調査（1996年）

2. 世帯の類型化

すべての世帯が表1に示したすべての仕事をおこなっていたわけではなかった。世帯ごとに仕事の選び取り方は異なっていた。たとえば、イバンの重要な仕事と考えられがちな稲作は、1995~6年において半分強の世帯でおこなわれていたに過ぎない。一方、稲作とともに、籐籠の製作、木材伐採・製

13) 村では、表1で示した仕事以外に狩猟やパラゴムのタッピングがみられたが、それらは生計をたてる上でほとんど重要視されていなかった。また、食用林産物の採集は、ほとんどの世帯で、頻度の差はあれ、食事のおかずを得るためにおこなわれていた。しかし、それは、稲作、漁撈、籐採集などにいく先々でついでにおこなわれていたため、ここでは食用林産物の採集を一つの仕事として数えていない。

14) 紙面が限られるため、出稼ぎについては、別稿で詳しく報告する予定である。

15) 必要とされる労働力は、たとえば湿地田稲作では、作業法により異なるが、ヘクタール当り、田の地ごしらえに26人日、移植に56人日、収穫に90人日ほどである[市川2000]。表5に示すように、イバンでは性別や年齢によって仕事を選ばれる傾向がある。焼畑稲作と湿地田稲作では、樹林伐採を除き、女が中心となっておこなわれるが、男も30才代以上になると作業全般に参加するようになる。

16) 観察結果によれば、ヘクタール当り190人日ほどの労働力がかかる。

表3. 仕事の従事状況による世帯の類型化

●：従事、空欄：従事していない

類 型	稲作			稲作以外の仕事									出稼ぎ
	世帯番号	湿地田稲作	焼畑稲作	藤籠の製作	漁 撈	木材伐木・製材	コンショウ栽培	果物等の販売	家畜飼育	野菜等の販売	雑貨屋経営	人・物の運搬	
世帯類型 「稲作」+「出稼ぎ」+「稲作以外の仕事」 （7種類以上の仕事に従事）	1	●	●	●	●	●	●	●	●		●		●
	2	●		●	●	●	●	●	●				●
	3	●		●	●	●	●	●	●		●		●
	4	●		●	●	●	●	●	●				●
	5	●		●	●	●	●	●	●				●
	6	●		●	●	●	●	●	●				●
	7	●		●	●	●	●	●	●				●
	8	●		●	●	●	●	●	●				●
	9	●		●	●	●	●	●	●				●
	10	●		●	●	●	●	●	●		●		●
	11	●		●	●	●	●	●	●			●	●
	12	●		●	●	●	●	●	●				●
	13	●		●	●	●	●	●	●				●
	14	●		●	●	●	●	●	●				●
	15	●		●	●	●	●	●	●				●
	16	●		●	●	●	●	●	●			●	●
	17	●		●	●	●	●	●	●			●	●
	18	●		●	●	●	●	●	●		●		●
19	●		●	●	●	●	●	●				●	
20	●		●	●	●	●	●	●				●	
21	●		●	●	●	●	●	●				●	
22	●		●	●	●	●	●	●				●	
23	●		●	●	●	●	●	●				●	
24	●		●	●	●	●	●	●				●	
25	●		●	●	●	●	●	●				●	
26	●		●	●	●	●	●	●				●	
27	●		●	●	●	●	●	●				●	
28	●		●	●	●	●	●	●				●	
29	●		●	●	●	●	●	●				●	
30	●		●	●	●	●	●	●				●	
31	●		●	●	●	●	●	●				●	
32	●		●	●	●	●	●	●				●	
33	●		●	●	●	●	●	●				●	
34	●		●	●	●	●	●	●				●	
35	●		●	●	●	●	●	●				●	
36	●		●	●	●	●	●	●				●	
37	●		●	●	●	●	●	●				●	
38	●		●	●	●	●	●	●				●	
39	●		●	●	●	●	●	●				●	
40	●		●	●	●	●	●	●				●	
41	●		●	●	●	●	●	●				●	
42	●		●	●	●	●	●	●				●	
43	●		●	●	●	●	●	●				●	
44	●		●	●	●	●	●	●				●	
45	●		●	●	●	●	●	●				●	
46	●		●	●	●	●	●	●				●	
47	●		●	●	●	●	●	●				●	
48	●		●	●	●	●	●	●				●	
49	●		●	●	●	●	●	●				●	
50	●		●	●	●	●	●	●				●	
51	●		●	●	●	●	●	●				●	
52	●		●	●	●	●	●	●				●	
53	●		●	●	●	●	●	●				●	
54	●		●	●	●	●	●	●				●	
55	●		●	●	●	●	●	●				●	
56	●		●	●	●	●	●	●				●	
57	●		●	●	●	●	●	●				●	
58	●		●	●	●	●	●	●				●	
59	●		●	●	●	●	●	●				●	
60	●		●	●	●	●	●	●				●	
61	●		●	●	●	●	●	●				●	
62	●		●	●	●	●	●	●				●	
63	●		●	●	●	●	●	●				●	
64	●		●	●	●	●	●	●				●	
65	●		●	●	●	●	●	●				●	
66	●		●	●	●	●	●	●				●	
67	●		●	●	●	●	●	●				●	
68	●		●	●	●	●	●	●				●	
69	●		●	●	●	●	●	●				●	
70	●		●	●	●	●	●	●				●	
71	●		●	●	●	●	●	●				●	
72	●		●	●	●	●	●	●				●	
73	●		●	●	●	●	●	●				●	
74	●		●	●	●	●	●	●				●	
75	●		●	●	●	●	●	●				●	
76	●		●	●	●	●	●	●				●	
77	●		●	●	●	●	●	●				●	
78	●		●	●	●	●	●	●				●	
79	●		●	●	●	●	●	●				●	
80	●		●	●	●	●	●	●				●	
81	●		●	●	●	●	●	●				●	
82	●		●	●	●	●	●	●				●	
83	●		●	●	●	●	●	●				●	
84	●		●	●	●	●	●	●				●	

注：各仕事の経営規模、収益、従事期間の長さに関係なく従事の有無を示した。
 出所：筆者の現地調査（1996年）

材、コシヨウ栽培、出稼ぎなど多種の仕事に携わっていた世帯もあった。出稼ぎのみをおこなっていた世帯もあれば、逆に、出稼ぎをしていない世帯もあった。村びとはどのように仕事を選び、生計をたてていたのだろうか。以下では、悉皆調査に基づいて、各世帯の仕事の選択について検討する。

すでに述べたとおり、村でみられた仕事の季節・時期や必要とされる労働力は異なっていた。必要な労働力の違いは、仕事を選ばれる際、ひとつの重要な要因となると考え、以下では表1に示した12種類の仕事を労働力が村外に出てしまう「出稼ぎ」、村内の仕事でとくに労働力がかかる「稲作」、および村での「稲作以外の仕事」の3つに分けて、それぞれをおこなった各世帯の状況を検討した。

その結果、仕事の選び方によって、各世帯は大きく5つに類型化されることがわかった(表3)。すなわち、(1)「稲作」、「稲作以外の仕事」および「出稼ぎ」のすべてをおこなっていた世帯、(2)「稲作以外の仕事」と「出稼ぎ」をおこなった世帯、(3)「稲作」と「稲作以外の仕事」をおこなった世帯、(4)「稲作以外の仕事」のみをおこなった世帯、(5)ほぼ「出稼ぎ」のみで生計をたてた世帯、である。なお、類型(1)で、おこなわれた仕事の種類数は各世帯によって4~9(平均6.5)とばらつき、それに応じて必要な労働力も異なる。そこで以下では、とりあえず、おこなわれた仕事の種類数が7種類以上と6種類以下で分けて検討した。

すでに述べたように調査村において現金収入は重要であった。世帯の各類型ごとに、各々の仕事から得られた収入(調査対象期間の1年)を図2に示した。現金収入の面から、出稼ぎの果たす役割が大きいことがわかる。一方、出稼ぎをしない世帯では、木材伐採・製材がおもな現金獲得源であった。しかし、仕事の重要性は、現金収入の多少だけでは決まらない。多くの仕事に携わっていた世帯は、稲作、籐籠の製作、コシヨウ栽培、漁撈なども生計をたてる上で重要であるとしていた。これは表1で述べているように、出稼ぎや木材伐採・製材の仕事からは、継続的な収入が得られにくいためであった。

以下では、世帯類型ごとの仕事がどのように選択されていたのかを検討する。

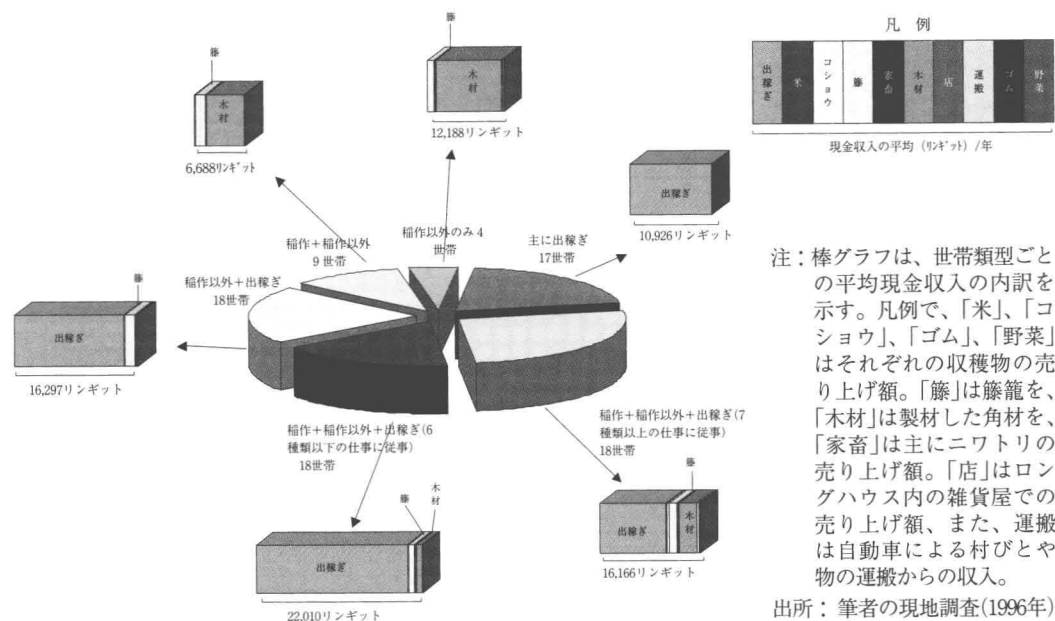


図2. 類型ごとの世帯数の比率と現金収入(平均)の内訳(1995.6~1996.5)

3. 世帯ごとに仕事の選択が大きく異なる理由

世帯の仕事の選択について、各類型ごとに表4にまとめた。詳細を説明する前に結論を先に述べれば、世帯によってさまざまな事情がみられるものの、各世帯の仕事の選択にかかわる大きな要因は、労働可能な人数¹⁷⁾と、労働の質（年齢、性別）や個人的な仕事の好みであった。また、特別な技術を要する仕事には、個々の村びとが個人的な人間関係を通じて習得してきた技術の有無が関係していた。

労働可能な人数と仕事の選択との関係には、次のような傾向がみられた。労働力が小さい世帯は、ほぼ出稼ぎだけで生計をたてるが多かった。たとえば、結婚・独立後、数年しか経っていない若い夫婦の世帯では、夫が出稼ぎをし、妻は夫とともに出稼ぎ現場に住みこんだり、村に残っても子守りに時間が取られるといった理由で、作業量の多い仕事はできなかった。世帯内の労働力が大きくなると、出稼ぎに加えて、村の仕事が増えてくる。労働力が最大となるのは、労働可能な親世代と子世代がいる世帯であった。この場合、子世代の男が出稼ぎをし、村に残った者が労働の質に応じて稲作やそれ以外のさまざまな仕事をするのが一般的であった。このような世帯は、1995～6年で9種類程の仕事に従事していた。

表4. 各類型ごとの世帯の状況と仕事の選択（1995年6月～1996年5月）

仕事の従事状況による世帯類型	世帯の状況等	おこなわれていた仕事
「稲作+」+「稲作以外」の仕事に「出稼ぎ」に従事（18世帯）	労働力が豊富（平均3.9人）、労働の質が多様。世帯主の世代とその子世代の両方が働ける。	子世代の若者が出稼ぎをし、それ以外の者が村での仕事をしていった。稲作、出稼ぎ、籐籠の製作、家畜飼育はすべての世帯で、また、木材伐採・製材、漁撈、コシヨウ栽培も大半の世帯でおこなわれた。4世帯が米を売った。
「稲作以外」の仕事に「出稼ぎ」に従事（18世帯）	労働力が小さい（平均2.8人） 配偶者の死別、子が修学中、出稼ぎ者がほとんど帰村しないため。	稲作と出稼ぎはすべての世帯で、籐籠の製作、家畜飼育は大半の世帯でおこなわれた。コシヨウ栽培および木材伐採・製材はそれぞれ2世帯のみでおこなわれた。
「稲作以外」の仕事+「出稼ぎ」（18世帯）	労働力が小さい（9世帯）。世帯主の夫婦が若い、または逆に高齢などのため。 労働力豊富（3世帯）だが、稲作を一時中断。 稲作を好まない（6世帯）：労働力は大きいが稲作以外の仕事をしていった。	出稼ぎはすべての世帯で、籐籠製作、家畜飼育、漁撈は大半の世帯でおこなわれた。コシヨウ栽培、果物販売、木材製材はそれぞれ、4世帯、5世帯および1世帯でおこなわれた。なお、労働力が豊富な3世帯は、1998年には稲作をおこなった。
「稲作以外」の仕事+「稲作」（9世帯）	労働力が大きい（4世帯）：村の仕事で現金を得る。 労働力が小さい（4世帯）：高齢で出稼ぎをしない。 壮年の男が病み上がり（1世帯）で出稼ぎをしない。	出稼ぎを一時中断、あるいは出稼ぎを嫌い、木材伐採・製材、コシヨウ栽培、籐籠の製作、家畜の販売、コメ売りで現金を得ていた。コメを売ったのは、労働力が大きく、広い田を作った2世帯であった。
「稲作以外」の仕事のみ（4世帯）	若壮年の男がいるが女の労働力がない（3世帯）：稲作をしない。 母子家庭（1世帯）：出稼ぎをしない。	男がいる3世帯は、出稼ぎを嫌いおもに木材伐採・製材によって、残りの1世帯は籐籠の製作や野菜の販売によって現金を得た。
おもに「出稼ぎ」のみ（17世帯）	労働力が小さい（11世帯）：ほとんどは結婚・独立後の年数が経っておらず若い世帯。 近年、帰村・入村した世帯（6世帯）	家畜や果物の販売、漁撈、狩猟などをおこなう世帯もあるが、ほとんど出稼ぎのみによって生計が立てられていた。

出所：筆者の現地調査（1996年、1998年）

労働の質と仕事の選択が関係することは、つぎの例に現れている。たとえば、働き盛りの年齢の男がいない世帯は出稼ぎをおこなわず、籐籠の製作、コシヨウ栽培、家畜飼育によって現金を得た。働

17) ここでは、15才以上の学業をしていない者を数えた。ただし、高齢者の仕事へのかかわり方には個人差がみられたため、実際に、世帯でおこなわれている仕事にほとんどかかわっていない者は人数に含めていない。

き盛りの女が多い世帯は、湿地田稲作や籐籠の製作といった女が中心的役割をはたす仕事をさかんにおこなない、コメや籠を販売した。逆に働き盛りの女がいない世帯は、稲作が敬遠される傾向があった。1995～6年では出稼ぎからでなく、当時収益が大きかった木材伐採・製材から現金を得た働き盛りの男もいた。彼らは、華人の親方の指図で働く建設現場などでの出稼ぎを嫌い、自分の勝手がきく木材伐採・製材の仕事を選んだといっていた。彼らがこの仕事が出来るのは、チェーンソーによる製材技術を習得していたからであった。のちに述べるように、その技術は個人的な人間関係を通じて得られた。このように仕事の選択には、村びとの個性が反映されつつ、性差・年齢といった労働の質、さらには技術の有無が関係していた。

表5. 調査村でみられた性差・年齢による仕事の選択傾向

○:積極的にこなす。△:人手が足りなければこなす。×:ほとんどこなさない。

おもな仕事・作業	男			女		
	若齢 10代～20代	壮齢 30代～50代	高齢 60代～	若齢 10代～20代	壮齢 30代～50代	高齢 60代～
籐籠の製作						
籐の採集	△	○	○	△	○	×
籐の加工・籠編み	×	△	○	○	○	○
籠の販売	×	×	×	△	○	×
狩猟	○	○	×	×	×	×
漁撈						
「どじょうすくい」法	△	△	○	○	○	○
投網法	○	○	△	×	×	×
刺し網の設置	△	○	○	×	△	×
刺し網からの魚回収	△	○	○	△	○	△
釣り針によるつり	×	×	×	○	△	○
木材伐採・製材	○	○	×	×	×	×
稲作(焼畑または湿地田)						
樹木の伐採	○	○	○	×	×	×
草地の伐採(湿地田)	×	○	○	△	○	△
除草剤の散布(湿地田)	△	○	○	×	△	×
散播(湿地田)	△	○	○	△	○	○
移植(湿地田)	×	×-△	○	○	○	△
点播のための穴あけ	○	○	△	×	×	×
点播(焼畑)	×	×	×	○	○	○
収穫	×	△	△	○	○	△
収穫米の運搬	○	○	△	×	△	×
出作り小屋作り	○	○	○	×	×	×
コシウ栽培						
除草剤の散布	○	○	○	×	△	×
収穫	△	○	○	○	○	△
収穫実の乾燥等	×	×	△	○	○	○
果樹栽培						
果樹の植付け・除草	△	○	○	△	○	△
収穫	○	○	○	○	○	△
パラゴム栽培・樹液採集	×	○	△	○	○	△
家畜飼育・餌やり	×	○	○	○	○	○
野菜栽培	×	△	○	○	○	○
出稼ぎ	○	○	△	○	×	×
人・物の車・バイクによる運搬	○	○	×	×	×	×

出所:筆者の現地調査(1996年、1998年)

村では、性差や年齢に応じて仕事を選ばれる傾向があった(表5)。イバンにおいて、性差や年齢差による分業は厳密にみられるものではないが、内堀[1996]やFreeman[1955]が焼畑作業を例に説明するように、一般的にみられる傾向である。村でみられた例からは、働き盛りの男がおこなうのは、遠方の森での籐の採集や狩猟、遠方の川での漁撈、出稼ぎなど、ロングハウスから遠く離れたところでおこなわれる仕事が多い。ロングハウス周辺でも、農地を開くための樹林の伐採、出作り小屋の建設、重い収穫物の運搬など力のいる仕事は男によっておこなわれていた。働き盛りの女は、ロングハウスの近くで、力はいらないがやや単調な農作業、籐籠の製作、漁撈などをおこなっていた。男でも年をとるにつれて、若いときにはしなかった、単調な農作業、籐籠の製作などに加わるようになる。

表4の詳細説明として、以下に各類型ごとにみられた世帯の状況を述べる。

(1)「稲作」、「稲作以外の仕事」および「出稼ぎ」のすべてをおこなった世帯(36世帯)

— 7種類以上の仕事に携わった世帯(18世帯) —

携わっていた仕事数が7種類以上の18世帯は、世帯内の労働可能な人数が平均3.9人と比較的多かった。すべての世帯で、世帯主の世代(40才代後半~60才代後半)とその子世代(10才代後半~30才代後半)がともに労働可能であった。子世代の男は出稼ぎをしていた。世帯主の世代と村に残った子世代がコシヨウ栽培(12世帯)、籐籠の製作(18世帯)、果物販売(15世帯)、家畜の販売(18世帯)、木材伐採・製材(13世帯)といったさまざまな仕事をして現金収入を得ていた。同時に、湿地田(15世帯)や焼畑(8世帯)を作り、4世帯がコメを売った。1996年の収穫米の量の測定が可能であった17世帯中、計算上自給が可能¹⁸⁾であったのは7世帯であった。そのうち5世帯が自給率200%を超えており、内3世帯がコメを販売した。

— 6種類以上の仕事に携わった世帯(18世帯) —

携わった仕事数が6種類以下の18世帯は、世帯内の労働可能な人数が平均2.8人であった。労働力がやや小さいのは、子が修学中、配偶者の死別などの理由による。出稼ぎに出た者はほとんど帰村しないため、村の仕事にかけられる労働力が小さい世帯も多い(5世帯)。いずれの世帯もコメは作っていたが、販売していなかった。コメの収穫量の測定が可能であった5世帯中、3世帯は計算上自給が可能であったが、自給率200%を超えてはいなかった。コシヨウ栽培、果物の販売、木材伐採・製材をおこなったのは、それぞれ3世帯、6世帯および2世帯と少なかった。

(2)「稲作以外の仕事」と「出稼ぎ」をおこなった世帯(18世帯)

7世帯は、世帯独立後数年のまだ若い夫婦(20才代後半から30才代前半)と子供からなる。夫が出稼ぎをし、村に残った妻が家畜飼育(6世帯)、籐籠の製作(6世帯)といった仕事をして現金収入を得ていた。妻は、子供がすでにある程度成長していたため、あるいは親が子の面倒をみってくれるため、子にさほど手がかからず村での仕事できた。

2世帯では、20~30才代の子が出稼ぎし、村に残った60才代のやや高齢な世帯主の世代がきつい湿地田や焼畑での仕事をせずに、籐籠の製作、コシヨウ栽培、家畜飼育をおこなった。

3世帯では、子が出稼ぎをし、50才代の世帯主の世代が村に残っていた。彼らは、以前は稲作をおこなったが、調査時には、かつて湿地田を作っていたバコン川沿いが遠いことと、ロングハウスの新築の仕事が忙しいという理由から稲作はしていなかった。しかし、ロングハウスの建築が進展した1998年にはいずれも湿地田稲作を再開した。

残りの6世帯では、世帯主が30才代後半~50才代前半で、これまで彼らはしばしば出稼ぎをおこな

18) コメの収穫量や自給率については市川[2000]を参照されたい。

った。残った妻子が家畜飼育（6世帯）、籐籠の製作（5世帯）、コシヨウ栽培（2世帯）などの仕事をしてきた。彼らは稲作はやれば出来るのだが、これまではしていないという。

(3)「稲作以外の仕事」と「稲作」をおこなった世帯（9世帯）

出稼ぎはせず、稲作と村で現金収入を得られる仕事をした世帯である。

4世帯では、世帯主の世代と成人した子世代が同居しており労働力が3～4人と豊富なため、世帯当たり5～8種類の仕事に従事していた。彼らは大きな湿地田（4世帯の平均1.1ha）や焼畑（2世帯のみ、平均0.8ha）を作り、木材伐採・製材（2世帯）、コシヨウ栽培（2世帯）、籐籠の製作（2世帯）、家畜飼育（4世帯）をおこなった。

別の4世帯では、労働可能な者が2人と少なく、世帯主が40才代後半～60才代前半と出稼ぎには年をとっているという理由で、村で3～4種類の仕事に従事していた。彼らは、0.5ha前後の湿地田を作りつつ、家畜飼育（3世帯）、籐籠製作（2世帯）、木材伐採・製材（1世帯）によって現金収入を得ていた。

残りの1世帯は、30才代後半の世帯主が病み上がりであったため、籐籠の製作や家畜飼育により現金収入を得ると同時に、妻とともに小さい湿地田（0.2ha）を作っていた。

本類型の多くの世帯は、出稼ぎの代わりに、木材伐採・製材、コシヨウ栽培、家畜の販売によって現金を得ていた。しかし、1997～8年においては、これら9世帯のうち1世帯は村を離れており、残り8世帯のうち5世帯は、木材伐採・製材などからのもうけがなくなったことを理由に出稼ぎをおこなった。

(4)「稲作以外の仕事」のみをおこなった世帯（4世帯）

3世帯には若い男がおり、1995～6年に収入のよかった木材伐採・製材の仕事を中心に生計をたてていた。しかし、彼らは妻がいなか病気のため、女が中心となる湿地田稲作や焼畑稲作はしなかった。男たちは、華人の親方の指示の下で働く建設現場などでの仕事よりも、自分の勝手がきく木材伐採の仕事を選んできた。

残りの1世帯は離婚した母子家庭であった。世帯主の女は、野菜等の栽培、籐籠の製作によって現金収入を得ていた。それらの仕事が忙しく稲作はおこなわないという。

なお、表1に述べたように、木材伐採・製材は1996年以降できなくなったため、1998年において上の3世帯の男たちはすべて出稼ぎをしていた。

(5)おもに「出稼ぎ」をおこなった世帯（17世帯）

11世帯は、結婚・世帯独立後年数が経っておらず、世帯主およびその妻が20才代後半～30才代前半と若い夫婦からなっていた。小学生以下の子供がおり、とくに3才以下の手のかかる子がいる世帯が多かった（5世帯）。このような世帯では、夫が出稼ぎをし、妻と子が村に残るか、あるいは夫と同伴で出稼ぎ先の飯場などに住みこんでいた。妻子が村に残った場合や帰村時には、妻は子守りをしつつ家畜の世話などはしていた。

4世帯では、世帯主がすでに40才代後半から50才代後半であった。それまで世帯の全員が町に住んで稼いでいたが、1990年代前半に帰村し、ロングハウスに居を構えた。彼らは、調査時ではまだ出稼ぎにより生計をたてているが、村の中での仕事も徐々にはじめるといっていた。ロングハウスがMB道路沿いに移転し、ミリからのアクセスが容易になったため、彼らは帰村を決心したという。

残りの2世帯では、世帯主は40才代前半とまだ若いのが、彼らは夫婦とも1960年代以降に調査村に移住してきた。彼ら自身の所有する土地が少ないため、湿地田稲作や焼畑稲作をおこなわず出稼ぎ中心

で生計をたててきたという。彼らはこれまでしばしば世帯の全員が村を空け、世帯主の出稼ぎ先に滞在することがあった。

4. 多くの仕事をおこなっていた世帯の状況

ここで、村びとは実際どのように仕事をおこなっていたのかを一つの世帯に着目してみよう。ここでは労働可能な人数が多く、先の類型化で「稲作」、「稲作以外の仕事」および「出稼ぎ」のすべてをおこない、合計9種類の仕事に従事していたD世帯（表3の世帯番号2）の例を示した（図3）。

D世帯の構成は、世帯主の男（63歳）、その妻（45歳、以下、妻）と彼らの息子（11歳）、世帯主の娘（31歳、以下、娘）と娘婿（35歳）および孫（3歳）の計6人であった。息子は小学校に寄宿しており2週間に1度週末の帰宅以外には家にいなかった。

図3aに示すのは、村でみられた仕事の中で最も集中的に大きな労働力を要したコメの収穫時期の状況である。D世帯の湿地田は、バコン川沿いの低地にあった。収穫時には世帯の全員が川沿いのロングハウスにとどまり収穫作業をおこなった。作業は、働き盛りの娘とやや高齢な妻が中心になって進めた。この世帯で出稼ぎをするのは娘婿であった。彼はこの時期、出稼ぎの契約が取れずに、ときどきミリへ仕事を探しに出つつ収穫を手伝った。娘婿は、結婚後、調査村に住むようになって5年間、いつもこの時期には出稼ぎをしており、収穫期間中ずっと村にいて作業を手伝うのははじめてだと言っていた。彼にとって、単調な収穫は気が進まない仕事で、合間をみては遠方の川へ漁撈に出かけたり、狩猟¹⁹⁾をおこなっていた。女

たちは、収穫作業をさぼる娘婿の文句はいうものの、彼の行動は彼の意思が優先されておこなわれた。もっとも高齢の世帯主は、ロングハウスで幼い孫の面倒をみつつ、収穫された稲の脱穀・乾燥の仕事をしていた。ときどき妻は、世帯主と子守りを代わって体を休め、世帯主が収穫に出た。3月中旬からコシヨウが実ると、娘夫妻がコメの収穫を続ける一方で、世帯主夫婦はMB道路沿いに出向いてコシヨウの収穫をおこなった。この時期には、なによりコメの収穫が優先され、その仕事を中心にD世帯の人々は動いていた。

図3bには、コメの収穫期が終わり、コシ

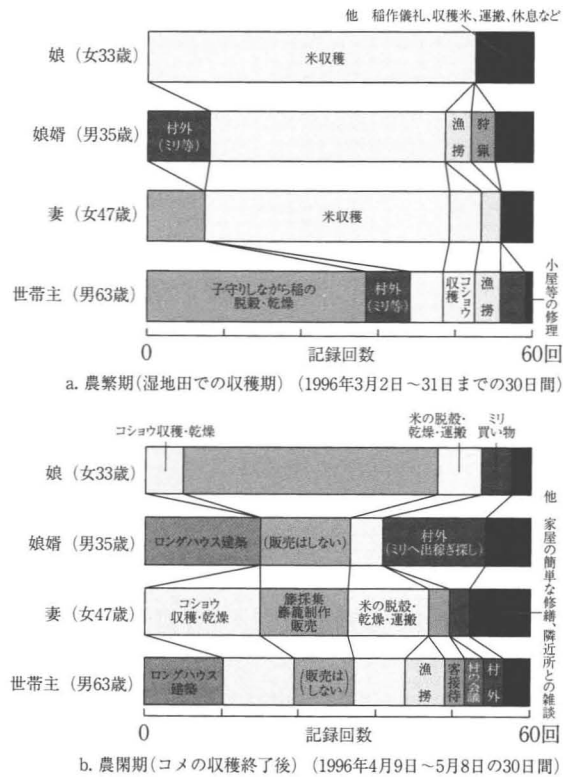


図3. D世帯構成員の仕事の状況

注：棒調査は、D世帯の各人が昼間の午前と午後それぞれにおこなった主な仕事を、観察・聞き取り結果から記録した。ひとつの記録を1回と数え、調査期間内の合計の回数比を示した。夜間に仕事（籐籠製作、狩猟など）が及んだ場合はそれも1回に数えた。各人の記録の合計回数は60~62回であった。

出所：筆者の現地調査（1996年）

19) 5回の狩猟の結果は、マメジカ2頭とカエル5匹で、3回分の食事のおかずとして出された。

ヨウ収穫の最盛期を過ぎた農閑期の状況を示している。D世帯の人々はさまざまな仕事をはじめた。残ったコシヨウの収穫とその実の乾燥、籐の採集と籠の製作およびその販売、ロングハウスの新築がおもな仕事であった。籐の仕事は、娘がその採集、籠の製作、販売のいずれにも積極的にかかわった。娘婿は籐の採集には積極的に参加するが、籠の製作にはさほど熱心ではなく、販売にはまったくかかわらなかった。娘婿は、出稼ぎが引き続きみつからないためいらいだちながら、仕事探しにミリへしばしば出かけた。彼のこのような仕事への関与は、表5に示したように、村の30歳台半ばの男としては一般的であった。娘婿に比べ、高齢の世帯主は籠の製作にもより積極的であった。妻と娘は、ロングハウスの建築には一切参加しなかった。

以上の例から、世帯構成員は、世帯にとっての利益をあげることに配慮しつつ、構成員各々は自らの労働の質（性、年齢）や好みに応じて仕事をおこなっていることがわかった。このことが、世帯間で仕事の選択の違いを生む一つの要因となり、同時に、ひとつの世帯で多様な仕事が見られる要因となっている。

現金収入面から村の仕事を評価すると、出稼ぎの占める重要性が突出していた（図2）。現金収入を得る上で出稼ぎは大切であるが、上述のように、出稼ぎの機会は不安定で、それがみつからないときは娘婿のように村での仕事がおこなわれていた。村びとの大半は出稼ぎをしていないが、彼らは各々の労働の質や好みに応じ、村の生態環境を利用したさまざまな仕事をしつつ生計をたてていたのである。

IV. 新しい仕事の普及過程

村では、入植時から調査時までの間、村外の社会・経済状況の変化に応じるように、村びとの生業は大きく変遷した[Ichikawa2003]。そのような生業の変化を引き起こすと考えられる村びとの行動は調査中にもみられた。新たな仕事が村びとによってさかんに試される例がいくつも見聞されたのである。そのうち、ある仕事は村でさかんになり、ある仕事は続けられずに消えていった。ここでは、こうした新しい仕事の試みや、その普及過程をみることによって、村びとの生業が大きく変化する背景を検討する。

1. 新たな仕事の普及についての事例

(1) 籐籠の製作

調査村では、ござtikaiや生活の中で使われる各種の籠は、入植当時より籐で製作されてきた。しかし、調査時に村びとが売っていた籐籠のモデルは、近年商品として開発された。村びとは、その経緯を以下のように説明してくれた。MB道路の交通量が増えてきた1970年代半ばから、道路沿いに小屋を建て、焼畑で取れた野菜や、村で日常的に使われている平ザルengkerayaなどを並べて売ようになった。当時、籐製品は売られていなかった。村の一人の女が別の村で、ハエよけのおかず覆いを籐で編んで作ることを学び、それを試しに道路沿いに並べたところ売れた。それ以後、籐製品作りが女たちの間でさかんになりはじめた。1985年頃のことだという。その後、ミリで華人が売っている籠を真似るなど、より売れる商品作りに思考錯誤を重ねた末、調査時にみら



写真1. 籐籠の販売

ミリなどの路上に籠を広げて売る。販売に携わるのは女のみ

れたような籠類が作られるに至った(写真1)。村において製作技術は、近親者や友人を通じて徐々に広まったようである。調査時にも、新たに村に入った嫁が姑などから籠の編み方を習う姿がみられた。

売る場所も変遷した。村のMB道路沿いの小屋から、ミリ近郊の店の軒先、マレー人居住地での戸別訪問、ブルネイ人が多いクアラバラムのフェリー発着場、ミリに新たにできたショッピングモールの軒先などである。村の女たちはさまざまな場所で試し売りをし、一人が売れる場所を見つけると、そこに多くの女が集まって売られた(写真1)。

(2)木材伐採・製材

木材を売る仕事は、バコン川沿いの隣村Bやその隣のA村では1990年頃からおこなわれていた。その当時、調査村の男たちは、チェーンソーで木の伐採はできたが、チェーンソーによって規格(長さ3.7m、幅15cm、高さ5cm)どおりに製材する方法を知らなかった。調査村の一人の男がB村の親戚から、チェーンソーによる製材を習って、彼は調査村で1994年からこの仕事をはじめたという。彼の儲ける様子を見て、さらに多くの男が彼から製材技術を習い、この仕事に加わるようになった。調査年では村の3割の世帯が携わる仕事となっていた。当初は村内の川沿いで伐採していた。その後、木がまだ豊富にあるところを探して、村内だけではなく、バコン川の対岸や支流のニャボール川に出かけ、ときには森の中に泊り込んでこの仕事をしていた。

(3)新たな出稼ぎのみつけ方

村びとは、より高い収入の得られる出稼ぎにしばしば職や仕事場を移していた。どのように、村びとが仕事を見つけたのかについて尋ねた結果を表6に示した。ミリ周辺に、海底油田採掘のプラットフォームでの仕事を斡旋する代理店や建設作業現場が多いため、村びと自らが直接そこを訪ね、仕事を申し込むか、あるいは親戚や知人からの紹介によって仕事を得ることが多かった。しかし、一方で、華人の親方との繋がりが、仕事を見つけた際には重要な役割を果たしていた。仕事の最初の情報が華人によってもたらされることが多いからである。一人の村びとが華人の紹介で仕事をはじめ、その後、その村びとの紹介で大勢の村びとが同じ建設現場で働く例は多い。村びとは、仕事の情報をミリなどの華人の親方taukehを訪ねたり、電話をすることによって得ていた。あるいは、華人の親方がロングハウスの知り合いの村びとを訪ね、労働者を求めることもある。この場合、求人数に応じて、その村びとに近い親戚や友人に声がかけられていく。

仕事の情報は華人以外にも得られていた。村の20歳代～40歳代の男はミリに出ると、華人ばかりでなく、そこそこで会うかつての仕事仲間や知人と立ち話をし、あるいは茶を飲みながら仕事の情報交換をおこなった。そのような仲間は、他村のイバンであり、カヤン、クニャーなど民族の異なる人々であった。以上のように出稼ぎは、村びとが個人的に作ってきた人間関係から得られた情報により、み

表6. 出稼ぎ仕事のみつけ方

仕事の種類\みつけ方	親戚・知人による紹介	本人自ら探し・申し込む	知り合いの華人の親方に頼む。華人が探しに来る	新聞の求人欄でみつける
建設	23	27	10	0
オフショア*	7	9	0	0
運送	2	5	1	2
製造・機械整備	2	4	2	0
商業木材伐採・製材	2	5	5	0
警備員	1	2	2	0
その他	3	14	6	0
計	40	66	26	2

注：1. 1995年6月～1996年5月の間におこなわれた仕事すべてを対象に、どのような経緯でその仕事に就いたのかを尋ねた。出稼ぎ者本人がいない場合は不明なこともあった。

2. *オフショアは、海底油田採掘のためのプラットフォームなどの建設や維持管理の仕事。

出所：筆者の現地調査(1996年、1998年)

つけられることが多かった。

出稼ぎは、それまでの仕事の経験と、そこから得られた知識や技術の有無が仕事選びに大きく関係していた。たとえば、車や重機の運転、建築物の壁塗り、溶接、測量などが出来るか否かによって、仕事選びや収入に差がでる。

(4)その他

その他、新たに試みられたが、さかんにはならなかった仕事や、今後の普及が不明な仕事の事例は数多い。たとえば、一人の男が近くのアブラヤシプランテーションの湿地にいたカエルを捕まえ、ミリのレストランに2回ほど売った(1996年)。パコン川で大量に取れた魚を燻製にして、それを数人の女がミリ近郊で売った(2001年)。これらは儲けがでず1~2回試みられたが、すぐにおこなわれなくなった。

他にもいくつかある。ひとりの男が高収量のアブラヤシを400本植えた。4年後には果実を近くの加工工場に売りたいという(2000年)。MB道路沿いに農業局の補助を受けて10世帯がパラゴムの高収量樹を植えた(1992年)。ひとりの男がフィリピン産の闘鶏の雛を華人経由で買い、成鳥に育て売ろうとしていた(1998年)。ある世帯は焼畑でトウモロコシを大量に育て、ミリで売った(1998年)。何人かの女がミリの街頭でコメを売った(1996年)。これらの仕事の今後の展開は不明である。

2. 新たな仕事のみつけ方の特徴

以上の事例から、新たな仕事の試みは、男女を問わず村びと個々人がおこなっていたことがわかった。村で組織だっておこなわれはしなかった。最初に一人、もしくは数人が、儲かりそうなことを試みる。その仕事からの収益が多いと他の村びとも追従し、籐籠の製作や木材伐採・製材の例のように仕事がさかんになる。最初の試みは、村びとのこれまでの経験や、他村や他人からの情報を基にはじめられた。たとえば、先述の女たちによる魚の燻製を売る試みは、彼女らがミリやその周辺で籐籠を売っていた際、他村の女が鮮魚を売っているのを見てはじめたという。ミリでのコメ売りも、同様に他村の女のコメ売りをみてはじめられた。華人の親方の存在も村外の情報を得る上で重要であった。村びとは、出稼ぎで知り合いになった華人の親方を通じて、新たな仕事を得ることが多かった。先述のように、イバンの旅行き慣行ブジャライは、かつては、村を出て林産物の採集をしつつ、村外の出来事を学ぶ役割を果たしていた。ブジャライの現代版といえる出稼ぎも、現金収入を得るだけにとどまらず、華人からあるいは他村や他民族の人々から村外の情報を得るのに重要な役割を果たしていた。

VI. 村びとの個人的な裁量による生業選択：まとめにかえて

イバンは焼畑だけではなく、商品作物の栽培や出稼ぎなどいくつかの仕事を複合的におこなっていることが報告されてきた。近年みられる社会・経済的な状況下、仕事の多様性はさらに進んでいると考えられる。たとえば、調査村はミリに近く、加えて近年MB道路沿いに生活拠点を移したことにより、ミリからの影響を大きく受けていた。その結果、以前は村びとのおもな生業が水稻栽培とパラゴム栽培であったのに対し、今日では生業となりえる仕事は多種類みられた。しかも仕事の選択は画一的ではなく、世帯によって多様であることがわかった。このため、村でみられる生業を代表するような特定の仕事をあげることは難しい状況にある。この背景として、世帯内の労働力の多少と、世帯構成員の年齢、性別、仕事の嗜好といった労働の質や世帯構成員の個性、さらに仕事の技術の有無があり、それらに応じて仕事を選び取られていることが指摘されよう。

仕事の多様化は、地方都市の発展といった社会的変化、あるいはColfer[1983]が指摘するように除草剤やチェーンソーの普及といった農業技術の変化など、いわゆる近代化と密接にかかわっているであろう。しかしながら、II. 3で述べたように、イバンは、そのような近代的技術が導入される以前あるいは以後にかかわらず、生業のあり方を労働力事情に応じて柔軟に適應させてきた人々である。彼らが従来より持つそのような特性と強くかかわって、上で指摘した世帯あるいは個人と生業とのかわりがみられたと考えられる。

本稿は、ひとつの村の事例によってイバンの生業活動について検討してきた。サラワクでは地域によって社会・経済状況に違いがみられ、II. 3で指摘したように、地域の特性に応じてイバンの生業の特徴も異なる。しかし、今日では、多くのイバンの村が調査村と似たような環境下にあると考えられる。生業が道路や都市化の影響を強く受けているということである。近年サラワクでは、海岸に近い幹線道路だけでなく、そこから内陸に向けて急速な道路網の拡張がみられ、同時に都市化の進展も著しい。しかも、イバンは都市や道路網の影響が及びやすい大河川の中・下流域を中心に居住している。したがって、本稿で述べたような生業のあり方は広い範囲で共有されているであろう。

生計をたてる単位としての世帯の重要性は、これまで多くのイバン研究で強調されてきた。このため、私は、当初、村びとの生業について、世帯の生計に焦点を当てて調査を開始した。しかし、調査の進展とともに、上で述べたような世帯構成員個々人の事情に注意を払う必要性に気づいた。とくに、村びと個々人の裁量や行動が仕事をおこなう上で重要であることがわかってきた。このことを示す例は、本文中で述べた以外にも日常の中で多くみられる。たとえば、ある世帯で湿地田稲作の中心となっていた女が死去したため、次年からその世帯は湿地田を作らなくなった。その世帯に残った彼女の子らは、稲作は母親の仕事であって、彼らは別の仕事で暮らしをたてるという。農地の呼称や管理にも個々人に重きがおかれる様子が見てとれる。村では、湿地田を指し示すときに所有世帯を表わす名ではなく、その作業を担当する世帯構成員の個人名で呼ばれることが多い。コショウ園やゴム園の所有や管理も、実質的には世帯単位でなく個々の世帯構成員が単位と考えられる傾向が強い。個々の世帯構成員も、自ら担当の農地の作業・管理の責任を認識していた。世帯の各構成員は、世帯の生計を維持することを前提にしつつ、もっとも自らに適した仕事を選択していたのである。

新たな仕事を創り、また仕事を選ぶ上での村びと個々人の裁量が、社会・経済状況に対応するかのよう大きく変化してきた生業や、今日の世帯ごとにみられる多様な生業活動を支えているといえよう。IVの新たな仕事の普及過程での事例にみたように、イバンの村びと個々人は、能動的な行動と創意工夫により生業を積極的に変化させ、生活の糧を得ようとしていたのである。

謝辞

本稿は、博士論文「サラワク州バコン川流域のイバン村落における生態資源利用に関する研究」(2002年3月、京都大学大学院人間・環境学研究科へ提出)の第3章に加筆・修正を加えて執筆された。博士論文と本稿の作成にあたっては、京都大学東南アジア研究センターの山田勇教授、立本成文教授(当時)、安藤和雄助教授、および京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の古川久雄教授からご教示をいただいた。現地調査は、財団法人大阪国際交流センターの大阪アジアスカラシップ、財団法人住友財団の環境研究助成、財団法人大和銀行アジア・オセアニア財団の国際交流活動助成によっておこなわれた。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- Colfer, C.J.P. 1983. Change and indigenous agroforestry in East Kalimantan. *Borneo Research Bulletin* 15: (1),(2). 3-20 in (1), 70-87 in (2).
- Cramb, R.A. 1988. The commercialization of Iban agriculture. In development in Sarawak. ed. Cramb, R.A. and Reece, R.H.W. 105-134. Clayton: Center of Southeast Asian studies, Monash University.
- Department of Statistics, Malaysia (Sarawak). 1997. Yearbook of statistics Sarawak. 1997 Kuching.
- Dove, M.R. 1985. Swidden agriculture in Indonesia. New York: Mouton Publishers.
- Freeman, J.D. 1955. Iban agriculture: A report on the shifting cultivation of hill rice by the Iban of Sarawak. London: H.M.S.O.
- Freeman, J.D. 1970. Report on the Iban. London: The Athlone Press.
- Freeman, J.D. 1981. Some reflections on the nature of Iban society. An occasional paper of the Department of Anthropology, Research school of pacific studies, The Australian National University.
- Guerreiro, A. 1988. Cash crops and subsistence strategies: Towards a comparison of Kayan and Lahanan economies. *The Sarawak Museum Journal XXXIX No.60 (New Series)*: 15-55.
- ホン イブリン. 1989. 『サラワクの先住民』(北井一・原後雄太訳). 東京:法政大学出版局. (Hong, Evelyne. 1987. Natives of Sarawak. Kuching: Institut Masyarakat.)
- Ichikawa, M. 2003. One hundred years of land-use changes: Political, social, and economic influences on an Iban village in Bakong River basin, Sarawak, East Malaysia. In *The political ecology of tropical forests in Southeast Asia: Historical perspectives*. Tuck Po, L., De Jong, W., and Abe, K. (eds.). 117-199. Kyoto: Kyoto University Press.
- 市川昌広. 2002. 「サラワク州バコン川流域のイバン村落における生態資源利用に関する研究」(博士論文. 京都大学大学院人間・環境学研究科へ提出)
- 市川昌広. 2000. 「サラワク州イバン村落における湿地田稲作 —植付け方法にみる適応戦略—」. 『東南アジア研究』38巻1号. 74-94.
- Kedit, P.M. 1993. Iban Bejalai. Kuala Lumpur: Ampang Press.
- Kedit, P.M. 1988. Iban Bejalai and Sarawak's development. In *Development in Sarawak*. ed. Cramb R.A. and Reece R.H.W. 135-155. Clayton: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University.
- King, V.T. 1993. *The people of Borneo*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Leach, E.R. 1950. *Social science research in Sarawak*. London: H.M.S.O.
- Padoch, C. 1982. *Migration and its alternatives among the Iban of Sarawak*. Leiden: KITLV.
- Parnwell, M.J.G. and Taylor, D.M. 1996. Environmental degradation, Non-timber forest products and Iban communities in Sarawak. In *environmental change in South-east Asia: People, politics and sustainable development*. Ed. Parnwell, M.J.G. and Bryant, R. 269-300. London: Routledge.
- Pringle, R. 1970. *Rajahs and Rebels: The Iban of Sarawak under brook rule, 1841-1941*. Ithaca: Cornell University Press.
- Seavoy, R.E. 1980. Population pressure and land use change: From tree crops to sawah in northwestern Kalimantan, Indonesia. *Singapore Journal of Tropical Geography* 1: 61-67.
- 新村出(編). 1998. 『広辞苑 第四版』東京:岩波書店.
- Sutlive, V.H. 1992. *The Iban of Sarawak*. Kuala Lumpur: S. Abdul Majeed&Co.
- 高谷好一. 1979. 「南スマトラ、コムリン川流域の稲作景観」『東南アジア研究』17: 444-466.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』東京:勁草書房.

内堀基光. 1996. 『森の食べ方』東京：東京大学出版会.

Choice of livelihood activities by Iban household members in Sarawak, East Malaysia

Masahiro ICHIKAWA

The Center for Southeast Asian Studies, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan

ABSTRACT This paper examines livelihood diversity and flexibility in a village located near Miri, Sarawak, Malaysia. At present, a single typical livelihood of the Iban or an Iban village no longer exists, because the Iban easily adapted their livelihood in accordance with the local socio-economic changes. Even within a village, there are occupational options and periodic changes for each household. Studies on the Iban's livelihood have so far focused on the individual household (bilek family) unit. This paper extends those analyses to stress the importance of the functions of household members, with respect to the conditions of labor, such as a number of household members capable of working and their ages and sex, character and work and activity preference, and individual skills. Individual members who have different characteristics and abilities contribute to a diverse and flexible way of livelihood characteristic of the Iban.

In this study, it is found that the present livelihood and the periodic livelihood changes were brought about through the activities of individual members of households. Presently, in the village studied, various kinds of livelihood activities are practiced, including: planting wet paddy, pepper cultivation, rattan basketry, logging, and waged work outside the village. Preference for these activities by each household is different. Some households engage in all of the above-mentioned activities, while others only work for a wage. Waged work outside the village seems important, but some households make a living without it. Periodic changes in livelihood relate to changes in socio-economic conditions. Major changes occurred before the 1940s (the main activities were hill and wet paddy cultivation and wild rubber tapping), from the 1950s to the 1970s (main occupations were wet paddy cultivation and Para rubber tapping), and after the mid-1980s (various kinds of activities as mentioned above).

Received July. 15, 2002

Accepted Mar. 4, 2003